

文化財 やまと

大和村文化財保護協会発行



七鈴五獸鏡

大和村では最高峰の母袋鳥帽子岳(一三四〇・九メートル)に、サラ双樹が二十数本も生えていることを、発見者の田中裕先生から聞いて、私は少なからず驚いた。それというのも、この村にこの木があるなどとは夢にも思わなかったからである。

サラ双樹というのは、もとインド北部原産の常緑樹で、サラは梵語(ぼんご)である。これに漢字を当てると、娑婆(しゃば)の娑という字を当てて娑羅と書き、ジャラまたはサラと発音した。この木が有名なのは釈尊の死と関係が深いからである。仏陀の死を涅槃(ねはん)というが、

釈尊が涅槃に入る時、臥していた七宝の床の四方にサラの木が二本ずつ計八本生えていた。二本ずつあったので「双樹」といったが、釈尊が涅槃に入った途端に、時ならぬ白い花を開き、四方の双樹はそれぞれ合して一本となって涅槃の床を被い、樹色も白変して枯れたという。こうしたいわれを踏まえたのであろう、平家物語の冒頭に次のように歌われている。

先達

——サラ双樹のことなど——

会長 野田直治

娑羅双樹の花の色
盛者必衰のことわりを
あらわす

平家物語は、平家二〇年の興亡の歴史を描いた一大叙事詩であるが、これはその序曲の一部である。「盛者必衰」はすべてのものに通じる道理であるが、さしも栄華を誇った平家一門も、この道理から逃れることはできず、壇ノ浦のもくずと消えた。サラ双樹は、そうした平家の運命の象徴としてこ

りも、人恋しきを感じるのである。それを作者は「凡夫のおろかな心」として、いちおう反省するのだけれども、明らかにこれは人恋う近代人の歌であって、平家物語とは違った世界の歌である。

ところで、日本でサラ双樹と呼ばれるのは、インド原産のそれではなく、ナツツバキのことだそうである。田中先生に聞くと、ナツツバキは、ツバキ科の植物ではあるが、普通のツバキのような常緑樹でなく落葉木で、

花も六、七月ごろ白い花を開く。それでナツツバキというのだそうである。

郡上北高の金古先生の著「郡上郡植物目録」

に歌われたわけである。しかし、サラ双樹はいつの世にもこのように受け取られたわけではない。明治のローマン派歌人写謝野晶子の歌に次のようなのがあ

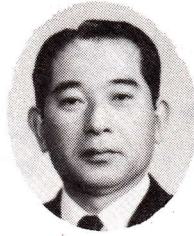
(一九八〇年刊)は郡内の植物一五二点について分布状況を調査し、方言のある植物はそれも併記したもので、研究者の便をはかった好著であるが、その中にナツツバキが高鷲村大鷲であると記されている。金古先生に聞くと、これは谷川川いに何本かあるといわれた。してみると郡上郡では大和高鷲の二か村にあるわけである。郡外では荘川村にあると金古先生

はいわれたが、ともかく、そうざらにある木ではない。実は、私が初めてサラ双樹を知ったのは、数年前、福井県平泉寺白山神社に宮司平泉澄博士を訪ねた時である。博士は元東大教授で大和村史(史料編)編集についてお世話くださった先生であるが、お宅の前庭にある一樹を指して、「これがサラ双樹だ」と教えてくださった。私は平家物語を思い出して、由緒深い白山神社の平泉家にこの木のあることにひどく心をひかれた。しかし、それは特別な場所にある特別な木であるように感じ、まさか自分の村にそれがあろうとは思っても寄らぬことであった。田中・金古両先生は、長い間郡上郡の植物研究に情熱を注いでこられた方々で、いわばこの道の先達(せんだち)である。母袋にサラ双樹のあることを知り得たのは、先達・田中先生のおかげである。話は飛ぶが、昨秋本会が実施した湖南の古寺見学がすばらしく、参加者の好評を博したのも、松井徳龍さんのいわれる(本誌掲載)ように、河合先生のようなすぐれた先達に負うところが大きかったと思うのである。

暮しのなかの紙

岐阜県工業技術センター

場長 佐藤 浩



紙のはじまり

昔、紙のなかったころ文字や絵を書くのに石や木片、銅板、壁、木の葉などが使用された。日本や中国では木簡、竹簡、木の葉が使用された。紙ができるまでは木簡、竹簡が現在の書物のように使われ、木の葉は保存の必要のない簡単な内容を書くときに使用されたようである。今でも簡単な内容は「はがき」に書くのが普通である。印字では木簡、竹簡はなく経文など多羅葉に書かれたといわれている。

エジプトをはじめ地中海に臨む各地では、湿地に自生するパピルス（カヤツリ草の巨大なもの）の皮の部分を乾燥させて記録材料としていた。（今から四〇〇〇年前のこと、現在でもエジプト地方には、パピルスが使用されているところがある）

ヨーロッパでは、小羊の皮を使っていたが、のちになってこれによく似た紙を「羊皮紙」と呼び、今でもコピーするときに使う薄い紙をパチメンメント紙（羊皮紙）と呼び、その名前が残っている。

紙の材料と産地

東南アジア、印度、ネパール、台湾、中国、日本では、桑の木のようにものを紙の原料として使用するようになった。

わが国では、がんび、みつまた（じんちようげ科の植物）、こうぞ、くわ（桑科）の木皮の部分を紙の原料として使うようになり、みつまた、こうぞは全国各地で栽培されるようになった。

紙の原料が栽培されたところには必ず紙をすく集落があった。今でも福島県をはじめ栃木、茨城、埼玉、長野、新潟、福井、岡山、鳥取、島根、熊本、愛媛、徳島、高知の各県では、こうぞやみつまたが栽培されている。

日本の紙

わが国では、いつころ、どこで

どんな紙が作られたか不明であるが、今から約一三七〇年前（西暦六一〇年）推古天皇の一八年に曇徴（韓国）が渡来したとき、漆、陶器、彫刻、紙、筆、墨を作る職人を連れてきており、仏教の教えを広めるとともに、いろいろな文化が広がったといわれている。

日本では一番古い紙は、奈良の正倉院に保存されており、大半は、奈良時代、平安時代のもが多いといわれている。

西暦八三五〜一〇五五ころの二〇〇年余りの間に和紙の作り方が非常に進歩し、量的にも沢山作られたといわれている。

このころに全国各地で紙が作られるようになり、西暦七〇〇〜七三〇年（天平時代）の正倉院の記録に「美濃紙をもって最良となす」とあり、そのころ既に美濃では紙すきが、さかんであったことがうなづけるのである。

紙の主な用途は、朝廷、神社仏閣で用いられる記録用、書物用、写経用として、こうぞ、がんび、ワラなどが原料として使用され、なかでも、がんびの紙は、紙が非常に耐えられ、虫が喰わないので保存用として、また細かい

字を書くのに適しているため専ら写経用紙として珍重されたようである。

美濃の紙

現在手すき和紙が生産されているのは、美濃市、武儀郡武芸川町、吉城郡河合村だけである。

古くは県内いたるところで紙が作られており、主なところは安八郡をはじめ本巣、揖斐、不破、武儀、郡上、益田、吉城の各地である。

岐阜県の紙の発祥の地は不破郡垂井町であるといわれ、当町には紙の始祖神が祀られている。

そのころの紙は写経用紙のほか奉書紙（書状用紙）が中心で、障子紙、書院紙として一般に使用されるようになったのは、二〇〇年くらい前のことである。

美濃市の歴史は、今から約一七〇〇年前（西暦八一四年、弘仁五年）羽場秀治という人が美濃市御手洗で、それから三年くらいおくられて太田宗九郎という人が同市上野で紙をすいたのが美濃紙のはじめとされている。

今でもその子孫が現存しており、その地域には、幅、太田の姓が非常に多い。飛騨の紙は、今から約四〇〇年

前（西暦一五八六年、天正一四年）に金森長近公の奨励によって始められ、今でも吉城郡河合村で冬場、農家の副業として手すき和紙が生産されている。

郡上郡では、根村、粥川沿いの部落、大和村で紙が作られた記録はあるが、詳しいことは分っていない。高級な和紙として有名な典具帖紙（こうぞですいた薄い紙）は別名を天郡上紙と呼び、その名から郡上郡のどこかで、すばらしい紙が作られていたのではないかと推測される。

紙はどんなところでできたか紙をすくには、多量の水があるので良質な清水のところで、谷の水、山の水の取水が便利な土地であること。

山林、農地の少ない山村。川の水が便利に使えること。

紙の原料（こうぞ、がんび）が山野に自生していたこと。

山裾、土手などに増植し、栽培することが簡単であったこと。

土地の有力者や領主の保護、奨励があったことなどにより、手すき和紙は需要の増加とともに全国に分布し、山村における冬の仕事として定着したのである。

紙の名前、呼び方

手すき和紙の生産が隆盛であったころ、全国各地で非常に沢山の種類の紙が作られていた。

同じ原料で、同じ用途のもので、その産地によって呼び方が違っているものが沢山ある。例えば

(1)用途による呼び方

障子紙、書院紙、奉書紙、提灯紙、傘紙、温床紙、写経紙など

(2)使用する原料による呼び方

こうぞ紙、がんび紙、みつまた紙

(3)産地名による呼び方
美濃紙、吉野紙、駿河半紙、名塩紙(兵庫県)、細川紙(埼玉県)

土佐紙、越前和紙など、

このほか産地と用途を合せた美濃書院紙、越前奉書紙などがありその種類は数えきれない。

暮らしのなかの和紙

生活のなかで和紙の存在は非常に少なくなくなった。昭和二〇年代には、農業用温床紙、和傘、ちり紙、障子紙、半紙などは手すき和紙であった。

いま一般の家庭で手抄和紙が使用されるのは皆無ではないかと思う。生産量も少なく、高価であり余り市販されていない。

最近では、手抄和紙に使用する

原料と同じものを使い、見た感じも手すき和紙と寸分も変わらないような紙が製紙工場で生産されている。例えば障子紙、茶用懐紙、提灯紙、典具帖紙、襖の下張り紙、奉書紙、写経紙のほか昔からあった手すき和紙のごとくが、機械すきになってしまった。

全国的にも手すき和紙の生産者は激減しており、美濃では国の重要無形文化財に指定されている本美濃紙の生産者五戸、その他に障子紙、薄美濃紙、民芸紙などを生産するものなど六〇戸余りと吉城郡河合村の一五戸余りである。

日本の住居と障子

最近の新築家屋に、かなり障子が使われるようになった。心にゆとりと暮らしに豊かさを求め、古いものを新しい感覚で生かした間仕切りとして、和紙の良さ、美しさが再認識されつつある現象ではないかと思う。障子の特長は

(1)光の透過性(採光性、拡散性)がよく、光をやわらげる。

(2)紙に通気性があり、空気の流通が生じ非常に衛生的である。

(3)断熱、保温性がよいので、暖冷房効果がよく、ガラス戸のように暖房による結露を生じない。

(4)和紙の白さ、明るさなど心理的な安定感がある。

日本建築の美の象徴ともいえる新宮殿は、一部を除き殆ど全部といてもいくらかの建具は障子である。長和殿、豊明殿、正殿、千鳥草の間、連翠の間、表御座所ならびに長和殿から正殿への一七五米に及ぶ回廊など障子の美と大内山、道灌堀など四囲の緑との調和、各殿の明るさと荘重さの調和など筆舌で表現できぬ建築美は障子によって、かもし出されていると感ぜられた。

書と紙

書は筆墨によって表現される芸術である。そこに紙があり、紙がその人の芸域を高めるために不可欠のものである。

墨痕鮮やかに表現される書の美しさは、洋紙では到底及ばぬところである。和歌をはじめ、かな文字の流暢な線で表現される美しさ、楷書、隸書などで書かれる写経文字の切れ味、墨のじみによる行書の味など書の紙は、欧米では見られない東洋独特のものであり日本の和紙は世界に類のない紙といえる。

和紙は、陶器、漆器のように長

年にわたり培かれてきた日本の伝統的工芸品の一つであり、先人の知恵と技能が結集されてできた貴重な文化財である。

長年紙に携った一人として、一三五〇年に及ぶ伝統と歴史をもつ和紙が、将来とも私たちの暮らしのなかに生き続けることを願ってやまないものである。

ナッツバキについて

田中 裕

母袋鳥帽子にナッツバキのあることがわかったのは、一昨年九月濃飛植物研究会の折であった。リョウブかサルスベリに似た幹だがそれらとはちがう。いろいろしらべた結果、ナッツバキとわかった。

ナッツバキはツバキ科、ナッツバキ属のなかまで、福島県、新潟県以南の本州、四国、九州の山地に自生する日本特有の落葉高木で十m以上になる。名の通り、夏の七月に白い花が上向きに咲く。葉はやや乾いた感じの革質でうすく秋には落葉する。木の肌は前述の通り、リョウブやサルスベリに似て赤褐色をしており、光沢がある。

これに対して、このあたりでみ



夏つばきの木と花

近江路と

十一面観音

河合俊次

大和村文化財保護協会では例年秋の文化財めぐりを行っているが

本年は湖南の古寺めぐり及び京都博物館の特別展「花鳥の美」を見学した。このうち近江路湖南の古寺は十一面観音の多いところで有名であり、今回はこれらの拝観を機会に十一面観音について述べてみたいと思う。

仏教の中で昔から現代に至るまで人々に最も信仰の多い而も親しみ深いのは観音菩薩（又は観世音菩薩）であろう。観音菩薩は仏教の菩薩の中でも最も早い時期に成立したといわれており、特に観音様は印度・中国・日本を通じて常に現世利益の多い仏様として多くの人々の信仰をあつめてきたのである。

観音菩薩は聖観音をはじめ十一面・千手・如意輪・馬頭・不空羅索（真言宗では准胝）の六観音並びに白衣・揚柳観音をはじめとす

る三十三観音等が一般に知られている。

これらの出典は二・三世紀頃に出来たといわれる漢訳の阿弥陀經や法華經から出ているといわれており中でも法華經の中には観音經が含まれており、そこには観音の強大な力やご利益が説かれているといわれている。

さて観音様を拝んでいると聖観音を除く他の六観音のすべてが我々人間の姿と違っていることに気付く。十一面観音は文字どおり十一の顔千手観音は十一面に四十二臂又は本当の千本の手を持ち、如意輪、馬頭、不空羅索、准胝観音は何づれも六臂乃至八臂を備えている。

これらは確かなことは分っていないが遠く印度の昔仏教興隆の頃に既に印度にあった民族宗教バラモン及びヒンズー教の影響であるといわれている。殊にヒンズー教の神々は多くの顔や臂脚を備え人々の願いに応じて所謂七面八臂の働きをして大きなご利益を民衆達に与えて来たものではないかといわれているが、仏教においてもこの影響を受け、夫々に変化観音が生れてきたものと思われている。



渡岸寺の観音

例えば如意輪観音は手に持つ如意宝珠や法輪を使ってあらゆる願いを意の如くに叶え、十一面観音は十一の顔を持ち十方世界をくまなく照して衆生を救うとか、千手観音は文字どおり千の手を自由自在に使い人々の煩惱を断ち救う等々であろう。

尤も十一面観音には六世紀頃中国で訳された「十一面観世音神呪經」にこれらを信仰するものには十種の果報、即ち無病息災十方諸仏を祈り、財物飲食充足、怨敵退散、慈悲が生まれ、熱病からのがれ、武器に害されず、水難にあわず、火難にあわず、不慮の死をとげないという十の利益を受けることが出来ると述べられているといわれているが、兎も角これらの事柄を考えると観音信仰はそのいづれもが仏教発生以来民衆の願いに

マッチし大衆の信仰を盛りあげてきたかがわかうというものである。さて話は近江路にもどるが、近江路は長い間都に近かっただけに多くの古寺があり、国の指定文化財は約二百七十余件、その中観音の指定は八十件近く十一面観音は実に約五十件にのぼるとし全国の四分の一近くをしめている。このように観音が多くまつられている理由は、第一には大和朝廷以来奈良京都と都が移ってもその都に最も近い地の利を得ていたことがあり、第二には最澄が比叡山に延暦寺を創建し天台宗の本山とし、湖岸の各地にその教えを広めたこと、第三には延暦寺創建当時は本尊として十一面観音がまつられたという説（佐和隆研氏）を信じない訳にはいかない。

これらの湖岸の観音様の殆んど

は平安期の造像であり平安期における観音信仰の盛んな様子が伺われ、都に近い近江路は定めし多くの人々が現世利益を求めて観音巡拝がなされたであろうことが想像される。

さて五十余体を数えるこれら近江路の十一面観音でその白眉は何と言っても湖北の渡岸寺の観音様（写真）であろう。これは近江路だけでなく全国の十一面観音の中でも特別に傑出した観音様であり一度は是非拝んでおきたい観音様である。

造像期は平安初期といわれているが足下の蓮肉を含めて一本彫成であり、全身のプロポーションが極めて美しく重厚で、秀麗な面貌バランスのとれた足腰、翻波式の衣紋、流麗な体の線の流れ等々その素晴らしさは筆舌では尽し難い。とまれ近江路の各地にはこのような寺院建築、仏像がふんだんに転在し、隣県に住む我々としては折にふれて参拝の機を得、今日まで千余年にわたって伝えられてきた仏様にめぐり逢ひ、更にはこれらを通じて文化財へのあたたかい心情をより一層に深めていきたいものだと考えている。

越前街道(一)

— 口神路・河辺の巻 —

有代信吾

近世から明治・大正のころまでは、八幡町から北へ延び、本村を経て油坂峠を越え、越前に至る街道を越前街道といつた。またこの街道は白鳥で分れて飛驒白川に通じるのでその方は白川街道といつた。ついでにいえば八幡町以南の美濃市方面に通ずる街道は郡上街道と呼ばれた。

越前街道の変遷を史料と古老の話などを中心にとどつてみたい。八幡町大瀬子から本村に入ると、口神路字破岩の歩岐である。この歩岐の道は、ずっと以前は川べりを通つていたが、天保年間に山の中腹を通るようになった。「万留帳」の天保一四年(一八四三)九月一日の大雨の記録の中に「この水に口神路村われ岩の道損じ、そら(当地方の方言)へほりかえろ。これまでは川べりを通る。今の道は新掘なり」(『村史資料編』二二六頁)と出ているので、このころに河畔を離れ

て、水害のおそれのない中腹へ作

り替えたものである。その道は現在の国道より約三〇m高い中腹にあったが、国道改修で削りとりたので今はない。この道が再び河畔を通るようになったのは明治二三年(一八八九)に上保筋道路

組合ができて、大改修が行われたときである。破岩を越えると同称なし口という所に出て、和田巖さん宅の裏を山すそ伝いに北上する

今もこの道跡は残っていて、古木などもあり、昔がしのばれる。道はここから和田月さん宅の前を通り、神路谷を渡るのであるが、

「和田さんの家の前あたりには越前街道の跡が残っていたが、すっかり変つてしまつて、昔の面影はない。」と先日亡くなられた臼田始徳さんが話されたことがある。

口神路から河辺へ越すには、杉ヶ洞を通つていたのであるが「万留帳」弘化三年(一八四六)の項に「今月(丑)二日七ツ時ころ(午後四時ころ)口神路村の上み新道にて当村(牧)甚左衛門馬町戻り、剣村の御伝馬荷の馬と行き合ひ、いかがしてか、二つ共道下へこけ、剣の馬は直ちに死す。当村の馬は途中

にかかり格別の怪我もなし」

『村史資料編』二二六頁)と、当時の交通事故の記録がある。「口神路村の上み新道」とあるから、おそらくそのころに杉ヶ洞を通るのを止めて、

字トヤシヤシ洞口から登り、字上ノ歩岐の、上保川に面した山の中腹に新道を作つたのであろう。この道は不完全なものであつたらしく

、雨が降り降りや新道抜ける、河辺の長六さの菌も抜ける、

というざれ歌が歌われたほど、よく壊れたということである

(故田氏談) 現在の道は国道の改修で大半は削りとられ、わずかに河辺地内に一部その跡が残っていたが、昭和五六年七月の豪雨で山が崩れ、それもほとんどなくなつてしまつた。この道が河畔を通るようになったのはいつのころか、

はつきりしないが、明治五年(一八七二)の村明細帳によると、河辺村に棧橋二か所。長さ七間(約三)ずつ、幅一間三尺(約七)ずつ、と出ている。河辺地内に棧橋があつたとすればこの河辺歩岐以外には考えられないので、明治五年以前

に河畔を通るようになり、必要なら

箇所

に棧橋を架けて通行したものと推察される。河辺地内の越前街道は現在の国道よりも

東の山際にあつた。横枕七右衛門さん宅の前

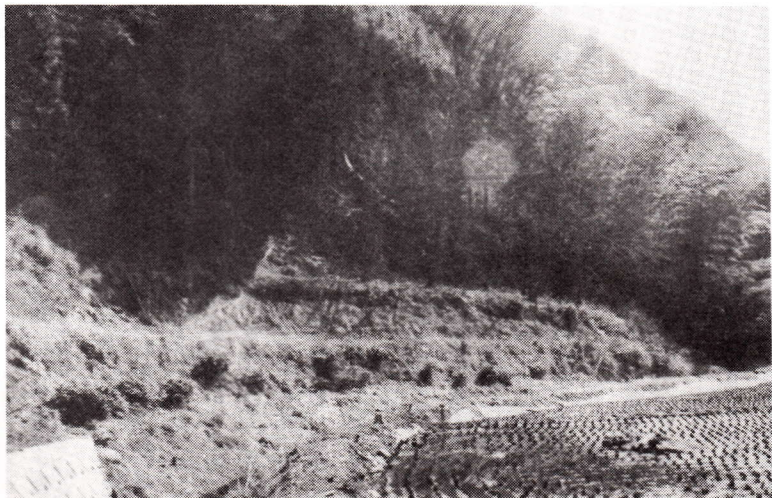
あたりに旧街道が残っている。

このようにして幕末から明治になつて、諸事一新される中で、郡内の道路も

遂次改修が行われた。明治二年には、郡上街道が県道に編入されて改良される

に及び、越前街道も沿線の各村が道路改修に努め、明治二年に上保筋道路組合を結成し、同三年四月には郡上郡会が、他の六路線と共にこの街道を郡主担道路とし

て大改修を行った。これによつて同三年三月に県道に編入されて道路の面目が一新されたのである。それまでは幅員一・八mくらいであつたのが、約三mとなり、地形も比較的平坦なので、郡内最良の道路といわれるようになったのである。



口神路の古道

湖南古寺巡り

本田 村人

大方の会員が雨傘を持っての出席であった。郡上を離れる頃より西の空がしだいに明るくなり、青空が見え初めた、気温も初冬にしては意外な程暖かくて、快適な見学旅行が約束された。大和村文化財保護協会の日頃の精神が天に届いた所以でもあるうか。

座席の落着いたところで、事務局の土松さんの司会で森藤副会長の御挨拶があり、ことに今回の研修旅行について企画その他万端をお世話下さった、河合先生、木島泉さんへ謝辞を述べられた。車中にとっと拍手が起り、御二人への感謝を表すこととなった。

車酔防止という名目のウイスキー等が回され河合先生より今日、明日の旅程について、大筋の説明と、見学先の国宝、重文についての解説を聞きながら、名神高速下り線走り続けた。湖南の四ヶ寺を今日一日で巡拝する予定なのでいきおい昼食は車中食である、少

しでも見学時間を稼ぐためである。途中右手に三上山が見えだした。其の昔郡上藩主、遠藤氏の最後の封地であったことなど土松さんより説明された。高速道路を降り、旧東海道を東

に向かう、はるかに遠山を巡らせ

た平坦な湖南の田園風景である。初冬の午後の陽差しがバスの窓を通して車内一杯に暖かい。今朝、車中で配っていた、古寺見学資料の順番とは逆コースに参詣

することとなり、一番目は国宝善水寺を目差す。曲りくねった、マイクロバス一杯の細い田舎道である。途中乗用車が一台道路の真中に放置してあり、近辺を尋ねても持主がみつからぬため、引返して別の道を進むこととなった。今様どこやらの「元兼」でさえこんなことはあるまいにと、大笑となった。善水寺の上参口に着く、櫓や楠の老木の生い茂る参道である。急勾配の赤土の地道が雨水に洗われて溝状の縞模様をなしている。山腹の平地に建てられた本堂まで、百五十米位の曲りくねった参道であるが、道巾の広いことから推しても往時より名刹であったことが偲ばれる。

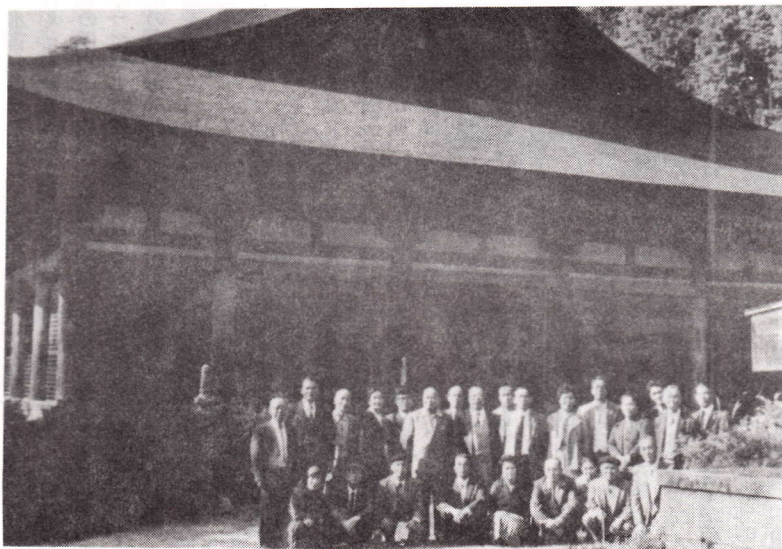
温かき初冬の陽差しはあれども、半ば枯れかけた泡立草の群がる休耕田を吹く風は冷たい。休耕田に添った道路の待避所にバスを停めて、次の巡拝先、正福寺の参道を上る、ここ正福寺は、創建は奈良時代と聞くが、現在の建物は新しく、数年前に建てられたものばかりである。安置されている、木造大日如来坐像、木造十一面観音立像、木造薬師如来坐像、木造地藏菩薩半跏像、いづれも重文指定のすばらしい仏像である。

善水寺の創立は和銅年間と伝えられ、現在の本堂は延文五年(一三六〇)火災後の復興で貞治三年(一一三六四)五月僧延海によって建てられたという、組物は軒支輪付の出組、中備に間斗束を入れ、建具は多く部戸を用いている。内部は前二間通りの外陣と後三間通りの内陣に分けた密教本堂の形式をそなえている、内外陣とも板敷で、周囲一間通りを化粧屋根裏とし、その他を組入天井とし、ま

た内、外陣境に格子戸と菱欄間を入れて区画を厳重にすることなど、密教本堂の通例にしたがっている。郡上近辺の、近世浄土教の寺院を見馴れている私共には全く異様な感さえ起る。

八十がらみの堂守りらしき方の案内を受けて、内陣裏堂を巡り、古き御仏達に別れを告げて善水寺を辞した。

信長の比叡山焼打につづく焼打ちをおそれ、当寺の信者達が土中深く埋め隠して法難をのがれたという伝承の説明がなされた。いづれも等身大の一木仏である、現在修復されているがその当時そうとう破損を受けたものとおもわれ



湖南善水寺にて

る、今回の古寺巡拝中ここ正福寺のみ浄土教寺院であった。

真直なだらだら坂の参道を下るとき、片側の生垣の「紫しきぶ」の瑠璃色をじっと見ていると数百年前、この参道を往来したのであらう、巾衣の女たちを連想するのであった。

先刻通った記憶の、旧東海道を横切り、少し入ったところに東寺、西寺、と呼ばれる古寺があり、ともに国宝の建物をもっている。長寿寺は東寺といわれる方である。山麓を苔むした石垣でおさえ、百米位の平坦な参道がある。山門を示す石柱に手を触れて中に入ると辺りが急に明るくなる。おびただしい銀杏落葉である。同行の一人は「私が初踏する」と言い残して小走りや黄落の中へ踏入って行った。

黄落の寺標親とう子とろかな
村人

黄は秋の果つる音して杵散る
村人

石垣の上の大銀杏の下に茶室風の平屋が見える。錆色の土壁に新しい標札がかかり石部町老人の家「長寿庵」と記してある。地方自治体の財政難は何処も同じだろう

と思い、遊休の建物を上手に利用している、この町の為政者に感服した。石垣がつきる処より境内が展げてくる。本堂は鎌倉時代の古風な外観をもっている、現在は天台宗である。良弁の創立と伝えられ、一重寄棟造りで隅棟が途中で少しむくりをもち神輿に見られるような反転曲線になっている。この型の屋根は平安、鎌倉時代にはかなりあったらしいが現在残っているものは京都の清水寺(国宝)とここだけのことである。一方的な反り屋根よりも松皮葺ながら萱葺屋根に似た暖かさがある。お庫裡の案内が又すばらしくかつた。「住職は二足の草履をはきまして、公務員をして居ります」などと、ほどほどのユーモアも交へて退屈させなかった。国宝寺院のお給仕は専らお庫裡の務めのようにであった。今日最後の見学地西寺常楽寺への道順なども親切な教え振りや最後迄好感のもてるお庫裡であった。

西寺迄の距離は凡そ二軒米である。平地の中に雑木林が点在し、起伏の多い田舎道である。阿星山の西麓へ向って女坂を歩き止るところが常楽寺であった。近年建て

られたものと思われる切石の寺標が妙に古刹にそぐわない。常楽寺は、和銅年間に良弁が開いた阿星寺五千坊の一と伝えられており、のち延文五年に火災があつて伽藍は焼失した。そこで僧観慶が再興を志した。以上の由緒は延慶元年又延文五年の奥書がある、二十八部衆、本堂の勸進状、等々によって知ることができる。

今回の見学旅行もこの二十八部衆を拝観の重点にしていたのであるが、堂守りの案内によれば昨秋二十八部衆の内二体の尊像が盗難にあい、未だ発見されないのと、内陣への参詣は許されなかつた。阿星山五千坊を焼いた信長でも、常楽寺門前では足がすくんで、火をかけることができなかつたと伝えられている。昭和はいよいよ末法と言ふべきか。

本堂に向かって左側の小高い所に三重の塔がある。三間、三重塔、本瓦葺き、室町時代の建立で国宝である、この塔は整然とした木割の三重塔で、様式は純和様からなり、後世の改変が少ないこと有名である、初重内部の壁画や装飾文様もまたよく残っているとのことであるが、開張は許されな

かつた。

国宝四ヶ寺の巡拝を終つて、一号線へ出ると、釣瓶落しの陽は阿星山へ沈もうとしていた、夕方のラッシュに揉まれながら湖西の宿泊先「さざ波荘」に無事到着した。明日はゆっくりと京都博物館、秋の特別展見学である。

研修旅行に

参加して

松井徳龍

出発直後、森藤副会長の挨拶の中で「文化財を見る目を養う」と、研修旅行の意義を言われた。

小生、この会に仲間入りし、ある人の勧めもあり、研修旅行に参加させていただいた。今まで各種の旅行に参加し、種々の文化財を見学し、国宝・重文に接する機会も多かつた。何世紀の制作・建造と聞いても、ただ一応の感嘆の表情はしたものの、そのものの価値までに、心が及ばなかつた。いわゆる、「ねこに小判」であつた。文化財に関しては、根っからの素人というよりはかならない。そう

いう者が研修旅行に参加しても、一行について歩くだけで、素通りで終わるのではないかと内心では思つた。

第一日目、湖南古寺を見学した。度々の戦火の中で、よくも現在まで残され、しかも、現在、国宝・重文といわれながら、乏しい補助金の中で真剣に保護されてはいるが、それらしき道路標識もない、バス一台漸く通れる位の田舎道をたどりたり探して当てるのがかつて観光化(俗化)されていかに心を惹かれた。ひなびた中に文化財が隠れひそんでいるというありさまであつた。車中、こんな田舎道に行くのだから、たいしたものはないのではないかと、思つた程だつた。しかし、そこにあるものは、思わず目を見張る傑作ばかりであつた。この様な辺鄙な所に、こんな立派な文化財があることを知っておられる、案内役の河合先生の見識の高さに頭が下がつた。

文化財など見学する場合、通一遍の説明を聞いただけでは、一応のことは分つても、見学の満足感を味わうことはなかなかできないものであるが、この度の研修旅

行に参加して、ほんとによかった、見てよかった、という印象の強かったことを感謝している。

第二日目の京都博物館見学と比叡山参拝―見学といった方が妥当かも知れない―は、第一日目と対称的なものであった。たいていの観光コース・見学コースに組み込まれる周知の場所であるため、見学者も多く華やかな感じである。

京都博物館特別展「日本の花鳥の美」に接することができたことを幸せだと思っている。障屏画・軸・どれもこれも迫力に富むものばかりで、作者が精根こめて制作したことがひしひしと身に伝わってくるようであった。

現代の絵画の中には抽象画が多く、自分の心にあるものを如何に表現しようとして思案の末、抽象化されると聞いていたが、そうしたものを見ると、分ったようではないことが多いものである。

しかし、特別展のそれは、言葉は当らないかも知れないが、極めて写実的のように感じられた。表現が素直で、素直さを如何に表現しようかとしているように思われた。鯉の絵に例をみると、動きのある鯉、静かに遊泳している鯉そのい

ずれもみな線一本の表現にも工夫がされていることがありありとうかがえた。線のことを言えば、幅六米以上もあるうか、六枚屏風風(?)に画かれた蘭草と鶉の絵にいたっては、何千本という蘭草一本一本それぞれ色調が異なり、線の流れも異なっている見事なものであった。よくも根気よくかけたものと驚く外はない。一本の蘭草

をかくの、どの方向に、どのようにと精神を集中させてかかれたことが見る者に伝わってくるようであった。あつ、しまったと失敗や、やり直しのきかない根をつめた制作が延々と続けられ、完成し得たことに思わず手をたたき賞讃したいような気持ちであった。展示されているものの中には、既に欧米に売却されていて、この

特別展のために出品されているものも数多くあった。日本の美術品が外国の手に渡ったことは、誠に残念なことではあるが、日本の美術品が外国において高く評価され大切に保存されていることを思うと、そうしたことも良いのではないかと、自分の心に言って聞かせたことであった。

その他、展示されている彫刻・仏教美術品を中心とした工芸品の数々があって何百年も前によくもこの様なものが作れたことに驚く。

技術は進歩すると言われているが、現代の技術では及びもつかないものではないかと思つた。制作者が時間を忘れ、寝食を忘れて専ら制作に集中している姿が目に見えるようであった。そうしたものが、文化財としての真の価値あるものではなからうか。

昼食後は、比叡山に向かった。北白川地蔵谷の幅員の狭い道路より有料道路に入り山上に向かった。山上に着くとさすがに寒気が身にしみた。下界と違い、古の北嶺の学舎という感じを受ける。法然・親鸞をはじめ、道元・日蓮・良忍栄西等々の開祖が仏道修業された地であると思うと、言いようのない緊張



湖南常楽寺参道

感を覚えると共に、わが宗祖もという懐しい思いもすることであつた。大講堂にはそれぞれの開祖の木像が安置され、一体一体を拝すと、悩み多きわれ等に向かつて、われもそうであつたと私達に話しかけておられるように感じられた。大講堂庭にある有名な開運の鐘を鳴らす人は絶え間ないが、どの人も本当の音量が出るだけの力はないのではないかと思う程大きい鐘である。

目的とする根本中堂は、何度参拝に來ても、地下とも思われる内陣のうす暗さの荘嚴さ、不滅の法灯の不思議な光と灯籠の美しさ、それに、修業僧が經典を誦する内陣手前のいくつかの座に、数多くの僧が仏道修業に励み、専ら心の安住を求め、自己との戦いをされた姿がうかんできく。

昭和十五年に再建された朱塗りの美しい法華総持院東塔を拝観した。そこに使用された松材は、国内では集めることができず、台湾より輸入したと聞いて、現代日本の一断面をこの山上においても見なくてはならないかと淋しい思いをした。

ふるさとの唄

加藤 一男

やぶ

祝唄

西行法師が 西行が

初めて東にくだるとき

熱田の宮へと詣でられ

こんな涼しい宮さんを

誰がつけたか熱田の森

このころは、家を建てる基礎はコンクリートやブロックでつくられるが、昔は大きな川石を基礎にしてつくられたものである。
この基礎をつき固めるため、石盤づきという行事が行なわれた。この行事のとき唄われていたのがこの祝唄である。直径二〇cm、長さ四m余りの松の木を八角にして上部に御幣をまつり、その下に長

さ一m中五cm余りに見事に削られたかなくすを房々とつけ、根本には柱が割れないように竹の輪をはめ、これに太縄をつけて、ヨイショ、ヨイショとはやしながらつき回り、にぎやかに勇ましく唄われた。

また、結婚の披露宴の際に花嫁を迎えた家の主人が、一升も入る朱塗の大杯で客をもてなしたことがあるが、そのときの肴としての祝唄が唄われていた。

その三

田植唄

今年しや豊年穂に穂がさいて

道の小草にも米がなる

この田植唄は、現在のように田植機でなく、一株一株手植えであった昭和三十年代ころまで、毎年六月上旬になると、あちこちの田から風によって流れてきた。この唄がいつのころから唄われてきたものか明らかでないが

天気よければ大垣様の

城の大鼓の音のよさよ

とあるところから、大垣近在では江戸時代に、すでに唄われていたものと思われる。

腰の痛い田植え仕事を、振舞酒のいきおいもあったが、皆んなで唄い合い、一刻の苦勞を忘れ、今年も豊年であれとの願いをこめて唄い継がれてきたものであろう。

ちよんぼちよんぼと植えてお

けば 秋には五穀の米がなる

その四

草刈唄

めでためてたの若松様よ

枝も栄えりや葉もしげる

一名よいよい節ともいわれる。昭和二十年代までは、稲の肥料には山草を刈り田に入れていた。この草刈りに唄われていたのがこの唄である。毎年五月の中旬から下旬にかけて、あちらの山、こちらの谷から自慢の唄声がこだまし合い、農繁期の忙しい中にもどか

な農村風情であった。

この唄の調子は、三味線にうまのくならず、三味線泣かせともいわれている。

桑の中から小唄がもれる

小唄聞きたや顔見たや



水都古寺探訪

土松 貞二

よべの雨苔まだ濡らす石だゝみ

散る紅葉一葉二葉は山門の上に

参道に銀杏落葉の明るさよ

斯の道の浄土へ続け帰り花

人恋し霧に寄せ散るホテルの灯

湖南紀行

有代 信吾

神杉の秀に風のあり秋の蟬

椎の実を捨ひていつか善水寺

渡り鳥塔をななめに常楽寺

しぐれきて比叡のみ山暗木立

宗祇柿七百年の甘さかな

比叡山

村井 正蔵

いにしえの名僧たちの経文の声は御堂に泌みいるごとし

ひとすじに真の道を求めたる僧らの姿まだみゆるなり

長寿寺三重塔

一道を極むることは安からね千古の技法をただ見上げるも

大和村における 指定文化財

・国指定天然記念物オオサンショウウオの生息地 小間見川全域

・岐阜県指定史跡 篠脇城跡

・岐阜県指定天然記念物

明建神社の社叢

口神路白山神社の六本ヒノキ

領家のモミジ

・岐阜県指定重要文化財

七鈴 五獣鏡

福田古墳一号二号墳出土品

縄文期 石製 品

・岐阜県指定無形民俗文化財

七日祭り

以上は前号にて紹介しましたので詳細を省略します。

(一)名称、(二)内容、(三)所在地、

(四)指定年月日、(五)管理者

岐阜県指定歴史資料

(一)東林寺跡出土品及び出土記録

(二)室町時代の懸仏 二面

(三)十一面観音坐像 三体

(四)銅製仏 一体

(五)懸仏の圈縁の残欠

- ・円鏡裏の木片 二面
- ・和鏡
- ・宝暦九年掘出仏由来書
- (三)大和村栗菓
- (四)昭和五八年二月二五日
- (五)応徳寺



東林寺跡出土品

(以下大和村指定)

史跡



(一)阿千葉城跡

(二)約一七七〇平方メートル

(三)剣字桃ヶ洞

(四)昭和四九年二月二四日

(五)剣区

- (一)松尾城跡
- (二)約一九七〇平方メートル
- (三)大間見字城山
- (四)昭和四九年二月二四日
- (五)松尾城跡保存会代表野田茂
- (一)福田古墳一号墳
- (二)一基 六世紀中ごろ
- (三)島字正神路
- (四)昭和四九年二月二四日
- (五)大和村教育委員会
- (一)丸山二号古墳
- (二)一基 七世紀前半
- (三)河辺字榎本
- (四)昭和五〇年二月二五日
- (五)清水 桐一
- (一)慈永大姉の墓
- (二)石造宝篋印塔一基
- (三)牧字内会津
- (四)昭和五〇年七月二三日
- (五)遠藤 周一
- (一)木戸口清水
- (二)約一〇〇平方メートル
- (三)牧字木戸口
- (四)昭和五〇年七月二三日
- (五)土松 康二

- (一)白雲山中世古墓群
- (二)五輪塔完全形一、不完全形二一
- (三)剣字矢田平
- (四)昭和五〇年七月二三日
- (五)剣区
- (一)木越城跡
- (二)約四七〇〇平方メートル
- (三)島(場皿)
- (四)昭和五三年六月五日
- (五)木越城跡保存会代表直井篤美

重要文化財

- (一)須恵器
- (二)蓋身二組 六世紀中ごろ
- (三)徳永字堀上
- (四)昭和四九年二月二四日
- (五)多賀神社
- (一)繪 馬
- (二)馬の図額一面 寛文八年
- (三)牧字妙見
- (四)昭和四九年二月二四日
- (五)明建神社代表栗飯原高照
- (一)丸山古墳出土品
- (二)須恵器一六点、鉄製品四点
- 金環一点、銀環一点
- (三)徳永
- (四)昭和五〇年二月二五日
- (五)大和村教育委員会
- (一)福田地区出土石器
- (二)石製品四点
- (三)剣(村民センター)
- (四)昭和五〇年二月二五日
- (五)大和村教育委員会
- (一)熊田古墳出土品
- (二)須恵器三点、鉄製品二点
- (三)徳永
- (四)昭和五〇年二月二五日
- (五)大和村教育委員会
- (一)四耳壺
- (二)口径一・二・二cm、器高二九・五cm、鎌倉期
- (三)徳永
- (四)昭和五〇年二月二五日
- (五)大和村教育委員会
- (一)古瀬戸灰釉瓶子
- (二)高さ二五cm、底径八cm、鎌倉期

- (三)牧
四昭和五〇年二月二五日
- (四)松森 益吉
- (一)横通遺跡出土品
- (二)縄文期石器、土器片、中世陶器片など一〇八〇点余
- (三)徳永
四昭和五六年三月三〇日
- (五)大和村教育委員会
- (一)大畑遺跡出土品
- (二)縄文期石器類及び土器片、中世陶器片など三六〇点余
- (三)大間見字大畑
四昭和五六年三月三〇日
- (四)池田 充彦
- (一)藤代遺跡出土品
- (二)縄文期石器類及び土器片、中世陶器片など二七七点余
- (三)大間見字藤代
四昭和五六年三月三〇日
- (四)藤代 順行
- (一)下栗巢出土石器類
- (二)縄文期石製品 七点
- (三)徳永
四昭和五六年三月三〇日
- (五)大和村教育委員会
- (一)陰地出土石器・土器類
- (二)縄文期石製品七点、土器一点
- (三)徳永
四昭和五六年三月三〇日
- (五)大和村教育委員会
- (一)友久遺跡出土品
- (二)石器類片、土器片、陶器片など二二六点点余
- (三)徳永
四昭和五七年三月三日
- (五)大和村教育委員会
- (一)古瀬戸四耳壺
- (二)口径二・五cm、器高一八cm
- (三)徳永
四昭和五七年三月三日
- (五)大和村教育委員会
- (一)観音堂附近出土石器類
- (二)石斧 三点
- (三)徳永
四昭和五七年三月三日
- (五)大和村教育委員会
- (一)薬師平出土品
- (二)提瓶一点、鉄器一点
- (三)徳永
四昭和五七年三月三日
- (五)大和村教育委員会
- (一)古瀬戸三耳壺及び古銭
- (二)口径一・一cm、高さ二七cm
唐宋銭二五〇〇点余
- (三)万場
四昭和五七年三月三日
- (五)黒岩 弘己
- 天然記念物
- (一)金劔神社の社叢
約三〇〇〇平方メートル
- (三)劔
四昭和五三年一月二五日
- (五)金劔神社代表河合 恒
- (一)白山神社の社叢
約一〇〇〇平方メートル
- (三)神路
四昭和五三年一月二五日
- (五)口神路白山神社代表森 捨吉
- (一)南宮神社のモミジ
目通り二・五m一本
- (三)万場二七三ノ一番地
四昭和五三年一月二五日
- (五)南宮神社代表稲葉 春吉
- (一)名血部白山神社のケヤキ
社叢内大ケヤキ二本
- (三)名血部一三八〇番地
四昭和五三年一月二五日
- (五)名血部白山神社代表下広 茂
- (一)七代天神社の鳥居杉
目通周囲四・一m大杉一本
- (三)島四四九三番地
四昭和五三年一月二五日
- (五)奥田 保次
- (一)旧西川役場跡のエノキ
エノキの古木一本
- (三)島二六六二
四昭和五三年一月二五日
- (五)大和農業協同組合
- (一)細川家のヒイラギ
目通り周囲二・六五m一本
- (三)古道一〇一三番地
- 四昭和五三年一月二五日
- 四細川 優
- (一)増田家のツツジ
- (二)オオムラサキ一本、キシマ一本、サツキ二本、計四本
- (三)栗巢一九七二番地
四昭和五三年一月二五日
- (五)増田 功一
- (一)滝日家のしだれ梅
推定四〇〇年生一本
- (三)牧一〇二一ノ一番地
四昭和五七年三月三日
- (五)滝日 治
- 大和村の指定文化財累計
昭和五八年三月末現在
- 種別 指定別 件数 備考
- 天然記念物 国 一
- 史跡 県 三
- 村 一
- 重要文化財 村 一
- 村 八
- 重要文化財 県 一
- 村 一
- 無形民俗 県 一
- 国指定 一
- 県指定 九
- 村指定 三七
- 合計 四七

會員名簿

(氏名) (役名) (電話番号)
(順序不同)

山下 運平 (顧問)	二四〇六	小池八重子	二二〇九	前田 孝	二二〇一	鷺見 豊夫	二七八八
国枝 貞雄	二二九三	藤沢五三郎	三一〇九	岩谷ますの	三三六二	《古道》	
日置 照郎	二〇七二	日置 幸雄	二二七〇	田口 政雄	三一七四	松井 弘雄 (理事)	二七九五
高橋 義一 (常任理事)	三七九二	池田 充彦	三〇九〇	《神路》		細川 優	二八六一
高橋 明 (理事)	二四八八	池田 栄枝	三〇九〇	森 忠敬 (理事)	二〇八三	《名血部》	
加藤 文蔵	二八〇二	小野江 勉	二七二五	山田 月男	三三六三	尾藤 由	三三〇三
田中 裕 (理事)	二二〇〇	小野江 利久	二七〇二	和田 眞人	二二一四	有代 信吾 (理事)	三三九一
池田 憲三	二二八二	日置智恵子	三〇五二	栗飯原高照	二二六二	有代 いせ	三三九一
畑中 定夫	二二六八	松井 直 (理事)	四〇八五	土松 康二	二七二九	森下 正則	三三九一
小池 久江 (理事)	二五七六	松井 博	三五〇八	日置 貞一 (理事)	二七〇五	下広 茂一	三三九五
青木 卦二	二二九二	松井 徳龍	三九九一	滝日 準一 (理事)	二七〇五	永谷 広	三三六七
畑中 康蔵	三五〇七	坪井 政夫	四〇九二	土松 貞二	三九八〇	佐尾 かと	三三二一
河合 俊次 (理事)	二二四六	坪井 庄市	三五〇四	遠藤 賢逸	二〇〇五	《島》	
河合 芳江	二二四六	古田 忠	四〇九〇	遠藤 光平	三九八一	森藤 幸 (副会長)	二七〇六
畑中 清子	三三五六	井口 一男	四〇二〇	滝日 友恵	三三〇六	森藤 雅毅	二六八四
河合 恒	三三五六	佐藤 秀夫	四〇〇一	松森 益吉	三九二二	奥田 保次	二二三二
佐藤 光一	三三〇一	《小間見》		加藤 一男 (理事)	二八七〇	奥田 守	二二九〇
日置 智夫	二七三〇	平沢 勤	三三三七	日置 一朗	三六七四	此島 広 (顧問)	二四八〇
河合 芳英	二二〇四	島崎 英二	三〇三七	遠藤 周一	二八九〇	須甲 甚一	二六六一
田中みさを	二二〇〇	田代 俊雄 (理事)	三九六五	日置 元衛	三九五〇	山田 長次 (理事)	三六四八
《大間見》		田中 吾一	二五四七	清水 定	二七一〇	山田 昌枝	三六四八
野田 直治 (会長)	二二八五	《万場》		清水美佐子	二〇二一	森 数雄	二五五四
野田 茂 (理事)	二二八五	畑中 浄園 (副会長)	二四四一	《河辺》		山田 良	二七九一
青木 新三	二四三六	畑中 真澄	二四四一	田中喜一郎 (理事)	三三〇一	山田 良	二七九一
村井 正蔵 (監事)	二二二三	石神 堯生	二四一三	清水 貞子 (理事)	二〇五二	松井 京二	三三二八
日置 繁	二二五八	井俣 初枝	二七五八	清水 幸江	二〇一九	白田 順慶	三三二八
				尾藤 元子	二二四七	直井 篤美	二六二二
				横枕千代子	二二八九	《落部》	
						若山 清	二八一七

昭和五七年度

事業報告

四月二五日

○総会

於村民センター 四五名出席

昭和五七年度事業報告及び収支
決算承認、昭和五七年度事業計
画及び収支予算承認、役員改選

○記念講演

「美濃紙の今昔」

講師 岐阜県工業技術センター

場長 佐藤 浩先生

五月二五日

○現地見学

高鷺村①鷺見城跡②大鷺白山
神社蔵懸仏③鷺見薬師堂④蛭ヶ
野自然園⑤蛭ヶ野分水岑などを
見学。参加者三八名

六月二三日

○県本部総会

七月八日

○役員会

於村民センター 一六名出席
一、文化財保護事業実施について

三、文化財見学（臨時）について

七月二五日

○明建神社社叢の桜保護（寄生苔
除去）を牧友会、篠脇文化顕彰
会の会員三〇余名にて実施され、
田中裕・土松新逸これに参加す

○役員会

一月二日

於村民センター 一七名出席
一、文化財見学（一泊二日）につ
いて

二、「文化財やまと」第八号発刊
について

三、「文化財やまと」第八号発刊
について

一月一日〜二日

○湖南古寺めぐりと京都博物館特
別展見学 参加者二六名

第一日湖南に於て善水寺・正福
寺・正寿寺・常楽寺に参詣見学
第二日京都博物館にて特別展
「日本の花鳥の美」を見学、帰
途比叡山に参詣見学す。

二月二九日

○役員会

於村民センター

一、昭和五七年度事業報告案及び
収支決算案について

三、昭和五八年度事業計画案及び
収支予算案について

三、昭和五八年度総会開催及び
記念講演会開催について

三月三一日

○会報「文化財やまと」第八号を
発行

発行

村付

語り手 小池 柳一

（記 久江）

（柳一かたりぐさより空寛え）

尾張の国の松岡が、白山詣りの
帰りがけ、白鳥の―白鳥の、下の
清水と云うとこで、十三姫が水を
汲む、いいきやるまいかよ、じょ
うさ姫、行きたいことは山なれど
旅のやわいが今なれば、一夜お待
ち下されと、一夜二夜は待ちもせ
る。旅のやわいが今出来た、白々
明けに白鳥を、暗うで越いたは黒
古川、小松林の十禅寺、梅の小保
木や白さぎや、足をけむいた赤穂
木、血をば止めたる、ちばら、野
で、先に討は無いけれど、剣と
聞けば恐ろしや、豆栗橋とは是ぞ
かよ、猿が、清水のお茶盆で水を吞

花鳥の美展をみて

木島 泉

花はこの世の中で最も美しいも
のとして人々に愛されてきた。人
はその生活の中にさまざまな形で
花をとり入れ、身近かに置いて暮
している。自然の中で咲く美しい
花を更に華麗にこしらえあげたり
絵画や道具、衣裳などに創造の花
を画き出しました。

この花鳥展で私関心をよせた
のはそれである。
ほんとうは、もっと虚心にも
をみなければいけないのだろう。
しかしそうした感覚以外にみる見
方もまた必要なのである。
写真、抽象など、どれをも目を
ひきつけてはなさないのだったが

中でも衣裳のすばらしさには心を
うばわれた。

現代のように化学染料などなか
つた時代に、何百年もたった今日ま
で残っている色の見事さ。又、大
胆な図柄は、今日でさえ模放の域
を出ることはあるまいとさえ思え
る。私たちは、テレビなどで着て
いる姿を想像するだけなのだがこ
れらの衣裳を着こなした女人たち
を想像するのは愉しかった。染色
ももとより、刺しゅうの細かさ。
どれほどの手がかかっていること
だろう。

次号原稿募集

一、見学期 八〇〇〜一五〇〇字
二、文化財主材短歌 三〜五首
三、文化財保護に関する随筆 俳句 三〜五句
原稿〆切 八〇〇〜一五〇〇字
五九二年二月末日
発行予定 三月末日
宛先 文化財保護協会事務局
（大和村教育委員会内）

昭和五八年度 事業計画

一、会議

○総会の開催 四月二六日

○役員会の開催 四・六・九・

一・三の各月及び臨時会

○常任委員会の開催 随時

二、見学及び研修会

○文化財に関する講演会 四月二六日

四月二六日

○岐阜県博物館特別展「考古遺物

展」見学 四月下旬

○郡内文化財の見学 六月上旬

六月上旬

(白鳥町の文化財)

○駿河路の文化財見学 (一泊二日) 一〇月下旬

一〇月下旬

○本部主催研修会に参加

○村民祭に参加

○その他臨時文化財見学

三、全報「文化財やまと」の発行

B五版一四ページ

各三〇〇部 三月

昭和57年度会計報告

収入の部

項目	決算額
1. 前年度繰越金	7,887円
2. 年会費	272,000
3. 特別会費	582,000
4. 補助金	50,000
5. 諸収入	4,341
計	916,228

支出の部

1. 会議費	41,700
総会費	9,300
役員会費	32,400
2. 事業費	699,994
業研修費	640,994
研究会費	60,000
3. 需要費	29,360
消耗品費	19,760
通信費	9,600
4. 負担金	136,000
計	907,054
差引残次年度へ繰越	8,174

昭和58年度予算

収入の部

項目	予算額
1. 前年度繰越金	8,174円
2. 年会費	272,000
3. 特別会費	600,000
4. 補助金	45,000
5. 諸収入	4,826
計	930,000

支出の部

1. 会議費	50,000
総会費	20,000
役員会費	30,000
2. 事業費	700,000
業研修費	640,000
研究会費	60,000
3. 事務費	40,000
消耗品費	15,000
通信費	15,000
10,000	
4. 負担金	136,000
5. 予備費	4,000
計	930,000

文化財の愛護に

ご参加下さい

編集後記

○文化財は、祖先が残してくれた貴重な公共財産です。わたくしたちの身近かなところにある多くの文化財を、みんなの力で愛護してゆきましょう。

○大和村文化財保護協会が発足してから八年目をむかえ、会員も一四〇名に達するようになりまして。この際より多くの方に参加していただいで、本会の発展を期してゆきたいと思えます。

○本会会員は岐阜県文化財保護協会会員でもあって、会員には、岐阜県文化財保護協会発行の「濃飛の文化財」(年二回)及び特集「文化財美濃と飛騨」をお届けします。

○本会の会報「文化財やまと」をお届けします。

○県本部主催の見学会・講演会研究会に参加できます。

○本会主催の文化財見学その他の研究会・講演会に参加できます。

○会員となるには、会費二〇〇〇円をそえて、事務局(大和村教育委員会内)または、地区の理事へ申し込んで下さい。

☆彼岸過ぎてようやく寒さも遠退き、そここ明るく梅が咲き初めました。

☆会報第八号をお届けします。本年度二回発行の予定でしたが都合で一回になりました。しかし四月総会の際の佐藤先生の講演要旨を載せることができ、内容が豊富になりました。

☆文化財の現地見学研修は、本会の重要な事業ですが、その見学記や、それらを主材の短歌・俳句などはそのときの思いのたねとなり、本会報の内容を豊かにしてくれます。寄稿して下さい方々に深謝申し上げます。

☆東氏居館跡の発掘調査は、当初予定の三ヶ年に引続き今年も実施されるようです。尊い数多遺物の出土と貴重な遺構の検出されたこの文化遺産を、地元の私たちは総力でこれを護ってゆきましょう。

☆農事に忙しい日が追々近付いて来ますが、皆様格別ご自愛のうえ生産にお励み下さい。(土松記)